
インフィニット・ストラトスさん

次村陣八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトスさん

【NNコード】

N8189X

【作者名】

次村陣八

【あらすじ】

今流行のインフィニット・ストラトスを、自分の独自の設定、ネタを詰め込んだ短編集、と言うより四コマ漫が的な？原作崩壊、キャラ改变、意味不明、時系統無視など、様々な危険な内容を含んでいるので、気をつけながら見てください。警告タグは全部予防リクトエスト受け付けます

一次移行？（前書き）

やつちまつたＺＥ　！

セシリア戦途中からの開始です。

一次移行？

セシリ亞・オルコットが操る四機のピットを落としたからなのか、俺はどうやら調子に乗りすぎたらしい。

「ブルーティアーズは、六基ありますよ。」

俺のブレードがセシリ亞・オルコットの機体に傷を付ける前に、彼女の機体のスカートの部分から、新たに一基のピットがこちらに向かって飛んでくる。

突然の事なので、俺はよけられる筈もなく、直撃を食らってしまつた。

が、その時、このHIS、白式を装着し始めてから、ずっと表示していた、フォーマットとフィットティングの完成度を示すメーターが満タンになつた。

ディスプレイに表示する確認ボタン。それを直撃寸前で押す。

瞬間、頭の中に大量の情報が流れ込んで・・・来ない？

おかしい。確かに流れ込んでくると教科書に書いて有つたが。

不審に思つてみると、ディスプレイに新たな表示が現れる。

『白式を使用していただき、誠にありがとうございました。無料で使用できるのは初期設定のみであり、^{ブリセット}一次移行後の機体を使用する^{ファーストシフト}』

には認証キーを入力する必要があります。

今すぐ入力しますか？

はい／いいえ

注：認証キーは、57750円（税込）でお買い求めていただけます。』

え・・・

一次移行？（後書き）

今回で恐らくこの小説というより、短編集の方向性が分かると思います。

ただただ思いついただけのネタを、文章にして投稿してるだけ。

こんなものでも笑ってもらえたうれしいです。

11 / 3 誤字脱字の修正

一次移行？（前書き）

前回の続きを。
次は遅いかも。

キャラが違う場合、「やつこつもの」と認識してもらわねばおく（笑）

一次移行？

何とかピット直撃寸前に、機体に予め保存していた認証キーを入力して、一次移行（ファーストシフト）を開始させる。

ピットが直撃するが、痛くも痒くもない。煙を巻き上げるだけ。

少しすると、一次移行（ファーストシフト）が完了する。さらに洗練されたフォルムになる。俺に合う様になる。

煙が晴れ、セシリア・オルコットが此方を見て目を見開く。

「一次移行！？あなた、今まで初期設定の機体で戦つてらしたの！」

？」

「ああ。だがコレなら負け無い。本当にギリギリだったが、負けられ無い！」

この勝負の為に、籌と一週間もの間、ずっと剣道に打ち込んでいた。負けられる筈が無い。

今の白式の武装リストを見る。

リストが表示される瞬間、ポップアップメッセージが表示される。

『近接特化ブレード』『雪片一型』 使用可能

直ぐにメッセージは閉じられ、元々無銘だったブレードが『雪片一型』になる。

『雪片』

これは以前千冬姉がモンド・グロッソで戦った時に使つてた剣。

それを今、俺が握る事になる。

まつたく・・・

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよーー!」

横に右手を薙ぎ払う。すると先程まで何も無かつた右手に剣一雪片
一型一が握られていた。

それを一層力を込めて握りしめ、セシリア・オルゴットに突撃しよ
うと腰をおとす。それに合わせるように白式からまた、メッセージ
が出る。

『ワンド・アビリティ
单一仕様 零落白夜使用可能』

『零落白夜』

これもかつての千冬姉が使つてた单一仕様だ。

これで勝てなかつたら、千冬姉にも幕にも合わせる顔がねえな。

とか覚悟を固めていると、メッセージはまだ終わって無いのか、続
きが表示される。

『使用方法 :

地上密中間わざ

A
B

何故コマンド式!!--!-?

一次移行？（後書き）

11 / 3

誤字脱字修正

ハロ？（前書き）

ガンダムさんといつたらこれでしおう（笑）

ハロ？

突然だが、最近巷では『ハロ』なるロボット人形みたいな物が流行っている。

外見上は緑色の球体なのだが、これが結構すごい。ロボットなので動くのは当然、何と喋ったり、考え方をしたりもできる。

しかも、移動方法が転がるか、手足を出して歩くなど、かなり愛くるしい物で、女性の間でかなりの人気を誇っている。

当然、IIS学園は男女共学ではある物の、IISの仕様上、完全なる女子校に等しく、このハロなる物は、今IIS学園ではブームになっている。

さらには、学園側も、機械関連である為か、特に制限も設けておらず、今やハロは学園内の細やかな風景のひとつになっていた。

「こんな所にあるのか、ハロは。」

今俺が居るのは学園のグラウンド。今日もセシリリアと篠による鍛錬（と言う名のセシリリアと篠の乙女な争い）を終え、散歩中にたまたまここに来た。

「あれ？ あつちには確か何も無かつた筈だよな・・・」

IIS学園のグラウンドは広い。ので、このグラウンドは人工島の隅に位置しており、海の直近くに居る。最も、浜辺ではなく絶壁だが。犯人を追い詰める時に使う奴だ。

俺のが見つかったハロは、俺に気づいて無いのか、一心不乱にその体をぴょんぴょんと飛び跳ねながら、その絶壁に向かっている。うむ、本当に可愛いものだ。流行る訳だ。

俺は特に用事もなかつたので、ついて行つて見る事にした。

暫くぴょんぴょんと跳ねるハロの後を着いて歩いていると、ハロが絶壁から飛び降りた。

それを見た俺は、直ぐにハロが飛び降りた場所に行き、そしてしたを、見てはいけない物を見てしまつた。

其処には、ハロの大群が居た。

それだけならまだ良い。

だが、問題なのは、そのうちの数体のハロから、腕が生えて居た。

腕と言つても、ロボットの腕じゃない。どう見ても人間の腕である。

しかも、その手には大量の写真が握られていた。

「おい、お前は本音をどう思つ?..」

「本音ですか。確かに良い子だとは思いますが、それだけですね。自分、ファース党党员ですか?..」

「なんだと、貴様!! 裏切るのか!!」

何か聞こえ。

「いい加減にしろ！！」

「？」

「織斑先生が一番だろうか！！」

また何か言つてゐる。

気がつけば、俺は立ち上がり、その場を去ろうとした。だがその時、お約束とも言える展開が起きた。

くるりと踵を返した際に、小石を一つ、したに蹴落としてしまつ。

その時の音で、下に居るハロ達は、俺に気づく。そしてそのまま飛び上がり、全員で俺にのしかかる。

*

「さう……！」

ガバと握りしめていた布団を跳ね除け、上体を起こす。

右へ左へと田を向け、隣のベッドで眠る篝を視界にいれて初めて、ここが自分の部屋だと認識する。同時に先程見ていた悪夢を思い出す。

「悪い夢だった・・・」

今もまだ冷や汗が止まらない。

ふと自分が眠るベッドの元で転がって居るハロが、自分が起きて居る事に気づいたのか、「ハロ！イチカ！ハロ！イチカ！」と、篝を起こさ無い程度の音量で自分に挨拶する。

それに軽く手を振る事で返事を返し、再び眠りに就こうとした一夏に、ハロが言つ。

「バラしたら殺すで。」

自分を殴つて氣絶した一夏に落ち度は無いと思つ。

ハロ？（後書き）

一人称と三人称が混じつてますが、気にしないでもらえると助かります。

11 / 3 誤字脱字修正

「アネットワーク（前書き）

ネタが浮かび上る時は出来るだけ早く投稿して行きます。

「アネットワーク

セシリア戦後

白式（以下白）「お~い、帰ったぜ」

打鉄（以下打）「お、白式さん。」苦労様でした。はい、お茶。」

白「お！ 気が利くね。有難くいだいても、うう。」

打「しかし、やはり今の操縦者じゃあ、白式さんを上手に扱えませんね。あ、試合見ましたよ！ 懐しかったですね。」

白「いや、そうでもねえぞ？」夏の野郎には才能がある。鍛えれば強くなれる。お茶おかわり。」

打「へい、今いれてきます。」

一夏「最近白式から何か聞こえるんだけど。何だこれ？」

竇「馬鹿な事言つてないでモツと訓練に励めー。」

白「か、帰ったぜ。(ドサッ)」

甲龍(以下甲)「私も、帰りました・・・(ドサッ)」

打「ちよーー白式さん!/?甲龍さんも!何が有ったんすか!/?」

白「ゼバゼバ・・・」

甲「はあはあ・・・」

打「ちよつと水を持つてきます。」

5分後

白「はあー生き返った!」

甲「ありがとう、打鉄。」

打「いえ、そんな。それより何が有ったんすか?」

白「それがさ、聞いてよもう。いい勝負してたのによ、いきなり無
人EVAが襲ってきてや、何とか撃退した訳だよ。」

打「それはまた大変でしたね。」

白「しかし、今回一夏の野郎は頑張ったね、あいつのお陰だったよ。」

甲「うちの鈴も頑張ったじゃ無いですか!まあこの調子で恋愛も頑

張つてくれればね～

白「ま、『ホールする事は無い』と思つが。」

打「違ひ無いっすね。」

一夏「鈴、お前誰かに恋したつて？頑張れよー。」

鈴「ちよーあんたがそれを言つたなー。」

一夏「？」

VTシステム擊退後

白「はあー。」

打「どうしたんすか、ため息なんか着いて。」

白「何で一夏の野郎の近くでばっかりイベントが起つてののかなつてな。」

打「そりや、主人公だからしかあ無いっすよ。」

一夏「いやいや、俺は主人公じゃありませんよ。はい白式、お茶。

打鉄も。」

白「お、サンキュー。」

打「いただきときます。」

一夏「俺も飲もう。」

三人「すずー」

鈴「ねえ、篠。一夏見かけなかつた?」

篠「見ていないが・・・」

「アネットワーク（後書き）

今回は地の文無しなので日本形式をとりました。

11 / 3 誤字脱字修正

ハロ？（前書き）

織斑先生キャラ崩壊のターン。
注意して読んでください。

ハロ？

IS学園の屋上は、他の学校と同じく、学生達の間の秘密のスポット的な場所である。

有名ではある物、しかし誰もこなーと言つのが現状である。

その屋上で、一体のハロが、器用に屋上を囲つ手摺りの上で「ロロロロ」としている。

そのハロは、他のハロと違い、所々に傷が入つていて、その年期の古さ物語つていた。

そのままハロが「ロロロロ」と転がつていると、隣に「ツン」と音がする。これまた器用に丸い手摺りの上に置いた缶ジューが発した音だ。

それに気づくと、ハロが止まり、後ろに回転して、来た人物を見る。

そこにいたのは、片手に缶ジュー、ハロの隣におかれたジューと同じものーを持つたこの学園で一番人気がある教師。織斑千冬である。

「どうしたんですか？元気が無いようですが。」

「あ、千冬はん。おおきに。」

と答え、ハロは手を出して缶ジューを開け、ぐいっと一口飲む。

それを特に驚かず見ていた千冬も、自分のジュースを開けて飲む。

「最近の若いもん見ると、わいせつもつ潮時やないかとももつじもあるんや。」

「そんな事はあつませんー貴方はまだ現役でもいけてますー。」

珍しく、熱くなつて熱弁する、織斑千冬。この年期の入つたハロは、彼女がEIS学園へ教師となる前からこの学園内に有つたものである。当初の千冬は、軍の教官やつてはいたものの、それと教師は違う。教師をやつて壁にぶつかった時、いつも彼女を慰め、アドバイスをくれて居たのが、このハロ男と呼ばれているハロである。

「せやな。おおきー。少し元氣が出てきましたわ。おおきー。」

「いいえ。こんな私の言葉で元氣になつてもうりえるなううううでも。」

「

そつこいつ千冬の顔は、少し赤かつたとか無かつたとか。

その頃、屋上へ向かう扉の裏側で。

(あの千冬姉が、敬語で喋つて居る・・・だとー?)

こんな事を考へている一夏が居たとかいないとか。

ハロ？（後書き）

11 / 3

誤字脱字修正

私の嫁（前書き）

キャラ、セリフなどが原作と少し気なく違っていますが、そ言ひ物と言ひ認識でおくです。

私の嫁

ラウラのHIS、『シユヴァルツェア・レーゲン』の暴走から数日後、一年一組に新しい転入生が入る事になった。

今はS.H.Rの時間、山田先生が説明して居る所である。

しかし、妙に戸惑っていると云つか、困っているようである。

「で、では、入ってください。」

これを聞いてすでに待機して居たのか、「わかりました」と言つ声と共にガララと開けられる教室のドア。しかし、この声が何処かで聞いた事があるような気がするのは、このクラス全員が思っている事だろう。

そして入ってきたのは、数日前に既に転入し終えたシャルル・デュノア。しかし、着ているのはE.S学園の女子制服である。

教室中にざわめきが走る。そんな中、シャルル・デュノア、いや。

「シャルル・デュノア改めて、シャルロット・デュノアです。なまえは変わりましたが、これからよろしくお願ひします。」

「と言つてデュノア君はデュノアさんでした。うつ、寮の部屋割りをもい一度決め直さないと・・・」

シャルロット・デュノアが挨拶する。

「これで教室内のざわめきが遂に叫び声の連続になつた。

「キヤー————シャルル君美少年じゃなくて美少女だつた！」

「

「あれ？でも同室だつた織斑君が知ら無い筈はないし、と言つ事は…」

突然ドアが蹴破られる。

「一夏！！死ねエエエ！！」

飛び込んだ鈴がＩＳを既に展開しており、その肩の衝撃砲は既にチヤージが完了し、いつでも撃てる。といふか既に撃つてきた。

「いいいいいいいい…？」

それを見た一夏はすぐに横に飛んで躲そつとするが、当然間に合わない。

誰もが一夏が粉々、或いはミンチになる未来を見ていた、が、その直前、ある人物がその怒りの攻撃を止めた。

全員が攻撃を止めた人物を見る。そこに居たのは、ＩＳを部分展開したラウラが居た。

「あ、ラウラ。『シユヴァルツェア・レーゲン』直つたのか？」

「ああ。コアは無事だつたからな、予備の部品で組み直した。それよりもだ。」

恐らく鈴の攻撃を止めたのは『シュヴァルツェ・レーゲン』の得意のAICだらう。

一夏がそんな事を考えて居たら、いきなりラウラに胸倉を掴まれる。

そのまま引き寄せ、ラウラが一夏の唇を奪つ——奪おうとした、それを一夏が咄嗟に横に顔を引く事で躱す。

躱された事に気づき、もう一度実行するラウラ、それをもう一度躱す一夏。

周りがこの展開に追いついていけず、ポカンとして居る時、それはまた数十回繰り返される。

そして遂に終止符が打たれる。

躱し続ける一夏に痺れを切らしたのか、胸倉を離し、つい、その顔を叩き飛ばす。

叩かれた一夏は、一、三メートル吹つ飛び、地面に落ちる。

そしてすぐに立ち上がり、叩かれた部分を摩りながら大声で言つた。

「一度もぶつたな——千冬姉にもぶたれた事無いのに——！」

場が凍りついたような気がするしたが、そんなことは関係無かつたんだぜ——！

その後、ラウラの「私の嫁」宣言と共に結局キスされてしまい、”

何故か” 築達にもぶたれ、今日一日で数十回はぶたれてしまつ。

その時のセリフを少し抜粋して見た。

鈴「アンタ私にぶたれたのもうたれたつて言つ的一。」

セシリア「ビツキリぶたれたいお犬さんが居るみたいにして、ちびんと躰をしなければ行けませんわね。」

築「・・・（セリフが無い、理性がなくなつたようだ。）「

私の嫁（後書き）

出席簿アツタクはカウント外として、それ以外では確かに殴られ無さそうですね。

11/3 誤字脱字修正

五反田禪（前書き）

五反田家を書いてみた。

蘭の口調がこれでいいのかが心配。

五反田弾

五反田弾。

織斑一夏の中学時期での親友であり、幼馴染である。鈴とも親友で、幼馴染である。

また、実家で「五反田食堂」なる飲食店を経営しており、店長—弾の祖父—五反田巖の人柄と、確かな味で人気を得て居る。

弾も、食堂の仕事を手伝う事がある。普段は祖父の巖の大声によつて下ろされるが、今日は客が多いからか、弾の妹、五反田蘭が呼びに行つて居るようだ。

蘭は、弾の部屋の前に着くと、ノックも挨拶もせずにに入る。いつも事だが、今日は少し不味がつた。

「フウウンー！」

ドス。

直ぐにドアを静かに閉じる。見て無いのだ。お兄が織斑一夏と書かれたラベルが貼られてある呪いの人形的な物を一何処から持つてきたのか—槍を使ってた刺してゐるのを、絶対に見てない。

（大丈夫。きっとドアの開け方が悪かっただけよ。だから大丈夫。うん。）

もう一度開ける。今度は少し開ける速さを落とす。が、変化は無か

つた。いや、有つたには有つた。

メラメラメラメラ

またドアを閉じる。自分の見間違いだ。だから自分のお兄が織斑一夏と書かれたラベルが貼られてある呪いの人形的な物を燃やして居る筈が無い。ちょっと服装が、何かの儀式用な気がしたが、それも氣のせいに違いない。

（だ、大丈夫。今のは多分開けるタイミングが悪かっただけ。今度こそ大丈夫。）

そしてもい一度開ける。そこには自分のお兄が、織斑一夏と書かれたラベルが貼られてある呪いの人形に、槍を持つて突撃してつて。

「なんでループしてるの、お兄！？」

五反田弾（後書き）

嫉妬心は誰にもあるところだ。

11/3 誤字脱字修正

五反田禪？（前書き）

弾弄の楽しさ（笑）

五反田弾？

五反田弾。

織斑一夏の中学時期での親友である。今回は彼の中学生活について書いてみよう。

朝。セツトした田覚まし時計によつて起こされる。食堂へ向かい、途中で必ず会う妹と一緒に朝食を食べ、着替えを済ませ、学校へ向かう。

途中で合流する一夏と一緒に登校。この時、この朴念仁のお陰でトラブル（女子絡み）が発生する時があるが、その時は一人で解決する。

クラスに到着後、SHRまで馬鹿話で盛り上がる。途中で鈴も交えて更に盛り上がる。途中、一夏が朴念仁スキルを発動しなければ。それから昼食まで普通に授業を受ける。授業間の休みも馬鹿話で終わらせる。途中、一夏が朴念仁スキルを発動（ry

昼。一夏と鈴と一緒に弁当を食べる。食べた後の残った時間は、同メンバー間の馬鹿話で終わらせる。途中、一夏が朴念仁スキル（ry

午後は、授業を普通に受ける。授業間の休みもやはり同メンバー間の馬鹿話で終わらせる。途中、一夏（ry

帰り、三人で一緒に帰る。その時の気分で弾の実家の食堂で食べるか、鈴の両親がやつて居る中華料理店、或いは一夏の家で食べるな

どなど。みんなで楽しく食べ、家に帰る。途中（ゝ）

家。その日に一夏が朴念仁スキルを発動した場合のみ起こる事がある。五反田家の全員が恐ることもある。

「やつてられつか、畜生！……リア充死ねえええ！……」

五反田弾発狂である。

この時のみ、五反田家のパワーピラミッドは逆転。家族全員で取り押さえても余裕で跳ね飛ばされ、手に持つ何処から出したのか、槍を振り回しながら、額にバンダナ、其れで蝋燭を挟むと言つ呪いの儀式の様な衣装に変える。

約三時間位暴れ、その後眠りに付く。

五反田禪？（後書き）

11 / 3 誤字脱字修正

ハロ男？（前書き）

連続更新無理でしたといつ事。

でも、ネタは出て來たので、後二三回は更新できるかも。

ハロ男？

IHS学園には、アリーナが幾つかが建造されている。主に訓練用と、大会などのイベント用である。

そのアリーナには、アリーナ内の非常事態に備えて、非常にハイスペックな通信室がある。非常事態時に、生徒たちへ知らせ、避難させる、或いは各国へ救援を要請するなどに使うのである。

当然、通信機器もハイスペック。

これはある日、第二アリーナの通信室で起こった事件である。

「おい！開ける！…中で何をして居る…！」

通信室が何者かによって占拠されてしまったのだ。その占拠された通信室の前で、織斑千冬がドアを叩きながら、中の人物に呼びかけて居る。

しばらく待つが、反応は無い。新しい面倒事に顔を顰めながら、もう一度叩こうと手を振り上げた時、聞き慣れた声がした。

ぴょんぴょんと飛び跳ねる音だ。其れを聞いて後ろを向くと、そこには、予想通り、少し年期が入ったハロ、ハロ男がこちらへ来て居る。

「何が起きとるんでつか？千冬はん」

「ハロ男さん！何者かがこの通信室に立て籠もっています。鍵がか

かつて居る様で、開きません。」

ハロ男の登場に思わず口元が弛みそうになるのをなんとか耐え。返事をする。

それを聞いてハロ男は小さく「えりでつか」と返す。

自分の腕を出し、その手に小さい針金を持つ。

その針金を、鍵穴に入れる。

カチカチとしばりくなつていると、直ぐにカチャヤと鍵が開く。其れに目を見開く千冬。

「あなたは、一体……」

「過去の置き土産つちゅつもんや。其れよりも早く入つた方がええですわ。」

ハロ男の過去は、霧に包まれるのみ。

織斑千冬？（前書き）

プログラマーアネキからストーカーアネキにレベルアップしました。

織斑千冬？

月曜日の朝、一年一組。S H R 前。

教室内で生徒達が賑やかに談笑して居る中、織斑一夏は、教壇の後ろで賑やかな教室を眺めて居るこのクラスの副担任、山田真耶に話しかけていた。

「あの、山田先生。千冬ね・・・織斑先生が何処に居るのか、知りませんか？」

「知つてますけど、何か用事でも有るんですか？」

「はい。昨日自宅に帰つた時に、織斑先生宛の郵便物が有つたから、渡そうと思って。」

昨日、毎週の慣例になつていた自宅掃除をしようと帰宅した時に見つけたので有る。

それを聞いて真耶が、それならと自分が代わりに渡しておくと言い、一夏も其れに従う事にした。だが、彼は知らなかつた。彼が自分の席へと向かつた時、真耶が浮かべた母性溢れる表情と、「織斑先生の至福の時間を邪魔しちゃいけませんし。」という呟きを。

その頃、寮と校舎を結ぶ道で、一つのハロが跳ねていた。少し年期の入つたハロ、ハロ男である。

寮へと向かう様に跳ねて居るハロ男。その向こうから一夏のセカンド幼馴染、鳳鈴音が走つて来て居る。

「どうやら寝坊してしまったらしい。それを見て、いち早く理解したハロ男は、ハロ式の話し方で大きく跳ねながら

「リン、アセルナーマダマニアウゾ！」

とフォローを入れる。

其れを聞いた鈴も、「ありがとう！」と振り返らずにも手を振る事で感謝を示す。

その一連のやりとりをうつとつとした表情で見て居た人物が居た。

織斑千冬である。

道路の両側に植えられて居るそれなりに大きいな木の後ろで隠れながら見ている。

しかも、気配を最大限に消しており、まさにコンピューターにも気づかれ無い位の物である。

そしてこのストーキング行為、もとい、尾行はハロ男が寮に入るまで続いたとか無いとか。

織斑千冬？（後書き）

11 / 3 誤字脱字修正

織斑千冬？（前書き）

千冬とハローのやつとりが書いて和む（笑）
では。後書きにてお知らせがあります。

織斑千冬？

IS学園、寮長室。

文字道理、寮長が使う部屋である。

基本、勝手に立ち入る事は許されず、寮長が許可を下した場合のみ、進入が許される。普通の部屋もそうだが。

まあ、この部屋へ進んで勝手に入るのは、ドムか学園内の新しい生徒か、特定の数名位だろう。

何故なら、この部屋を使っている寮長というのは、織斑千冬である。ブリュンヒルデの称号を持つているとか以前に、普通に鬼教師である為、誰も逆らわ無い。逆らいたくも無い。

そしてこの部屋の前に、一人の男子生徒が立つて居た。IS学園唯一の男子学生、織斑一夏である。彼が上記の「特定の数名」の内の一人である。

彼が此処に居るのは、前回自分のクラスの副担任－山田真耶－が彼女に預けた千冬宛の荷物をちゃんと届けたのかを確認する為である。自分の先生なのにと思う方もいるかもしだれないが、これは仕方ないと一夏は思っている。

何しろかなり天然な部分がある。とてもじゃ無いが、心配なのだ。で、数回寮長室の扉をノックする。

コンコンと小気味良い音が鳴り響くが、返事は無い。

不審に思い、ドアノブに手をかざす。ノブを捻つて見る。

「あれ？開いてる。」

閉め忘れたのか、それとも何か。ちょうど良いと思い、ドアを開けようとした所で、ふと嫌な予感が脳裏を掠める。

それはもう何処かのNTの様にピキーンと音が鳴りそうな位に鮮明な嫌な予感、いや、直感がした。

これを開けてはいけないと。開けたら確実に何かを失うと。

しかしそれを気のせいにし、ドアを開ける。

千冬姉。その手には緑色の球体がある。

「ハロ！チフユ！ハロ！チフユ！」

「おう。私は元気だ。ハロ17382号も、調子は良いか?」

「バツチコイ！バツチコイ！」

「そうか。元氣で何よりだ。」

何かその球体としゃべつて居る。

呆然としていると、中からせりて声が聞こえる。

「オチャヤ！ イルカ？ イレテクルゾ！」

「ああ。 なら一杯頼んだぞ。」

「ハロ！ ガンバル！ ガンバル！」

「マツテ、マツテ！ オレガヤル！ オレガヤル！」

「一ひら、31563号。24316号が先に行つたのだ。横取りは感心しないな。」

「ソウダ！ ソウダ！」

「アヤマレー！ アヤマレー！」

それは正しくカオスだった。

寮長室は普通の寮室よりも少し広い。しかし、その広い部屋でさえ狭いと感じる。

それだけの数のハロが居たのだ。

見つかる前に出よう。そうだ、そうじよう。絶対にその方が良い。荷物は山田先生を信じよう。人間関係の潤滑剤は信頼だ。

ドアに再び手をかざし、そのまま一歩後ろに下がる。しかしどうやら強く踏みすぎたらしい。ドンという大きな足音がした。

「つーー！誰だーーー！」

それを聞いたのと、ソレが起きたのは同時だった。

夥しい数のハロが一夏に向かつて雪崩れ込む。

その重みを感じながら、混乱の末、失つて逝く意識で茫然と

（ああ、本当の事だつたのか。）

こんな事を考えて居たとか無いとか。

織斑千冬？（後書き）

さて、お知らせですが、今回からリクエストを受け付けて見たいと思います。もう本当にネタが切れかかって居る。もつ弾と蘭の話しか思い浮かばない。

一夏ヒロインズの話が何故か全然思い浮かば無い。

ので、そっち関連でネタを募集します。期限は特に設けておりませんので、気軽に感想欄か、メッセージを送ってもらえたと嬉しいかな、みたいな？

後、ハロ男さんの関西弁、間違いだらけだと思うので、正しい方が教えてもらえると助かります。

これらとは関係なしに感想、誤字脱字の指摘も随时受付中。ユーモア登録無しでも書けます。

長くなつてすいません。

卵（前書き）

すいません。最近バイオ4卵縛りプレーをやりすぎました（笑）

@クルーズ。

IS学園の近くの駅前のデパート内にある喫茶店である。

ただし、ウエイター やウエイトレスはそれぞれ執事服、メイド服を着用しているイメージ喫茶店、平たく言えばメイド & a m p ; 執事喫茶だ。

普段はそれなりに賑やかな店内なのだが、今は数人を除いて全くの無声である。

何故か？店の入り口前に立っている三人組の所為だろう。

その三人、頭に、目と口に位置する所に穴を開けている靴下的な物を被り、手に銃器を持っているという、些か古典的な三人組である。

だが、たとえ古典的だとしても、その手にはハンドガン、ショットガン、サブマシンガンと、かなりメジャーな三種類の銃器を持つているので、危険があるに変わりはない。

そんな中、執事服を着込んだシャルロット・デュノアはどうしたものかと考えていた。

シャルロットは今日ラウラと一緒に買い物をしに、このデパートへやって來たのだ。

ランチを食べている間に色々と起り、なんやかんやで今日一日だ

けバイトする事になった。そしてこの騒動に巻き込まれた。

「どうした？ 急に静かになつたな。」

と言いながら、店の奥から出て来たのは、ラウラ・ボーテヴィッヒである。その片手には卵が三つある。

バイト途中、ラウラのあまりにもあまりな接客態度のため、裏方に回つてもらつたのである。かなりの客が残念がつて居たが。

そのラウラが入り口前の三人に気づく。その三人もだ。だが特に警戒せず、何やら話し込んでいる。

ラウラは、三人組の意識が自分に向かつて無いのを見ると、直ぐに片手にある卵一つを三人組のリーダーらしき人物——一番前に立ち、ハンドガンを持っている方——に投げつける。

その卵は寸分違わず、リーダーの目間に叩きつけられる。その衝撃で破裂し、中身をリーダーの顔に盛大にぶちまかれる。

「な、なんじゃこりゃあああああ……！」

手で顔に飛び散る汁を掬い、見た時のリーダーの反応である。バツチリ混乱している。隣にいる二人も、状況を掴みかねている。

その隙にラウラはリーダーに急接近し、側顔面に蹴りを叩き込む。その時何か白いうわ、何をする！ やめ（ｒｙ

蹴る途中、自分の右側にいる男ーショットガンを構えているーの手に卵を叩きつける。その衝撃で銃を落とす。

その男が銃を拾おうとする隙に、自分の左側の男——サブマシンガンを持つている方——に足払いをかけ、転ばせる。

自分の右側にいた男は銃を拾い、ラウラに向けようとしたが、さつきまで見ていたシャルロットに蹴られ、前のめりに倒れる。

その後30秒足らずで来た警察官に三人組を引き渡し、この事件は無事に収束した。

「ねえ、ラウラ。その卵を投げるってやり方、何処で習つたの？」

「教官から教わった。」

真面目顔で返されて、シャルロットは「さう」と苦笑しながら返すしか無かつたという。

織斑一夏？（前書き）

この小説における一夏くんの立ち位置は苦労人で決定。弾に苦労させてるのにね（笑）

今回の話は、自分なりに原作イベントを集計して見た。笑びいろはないかも。

織斑一夏？

織斑一夏の夜は早い。いつも9時前後で眠りにつく。

しかし今日は何故か妙に寝付が悪い。いつもなら布団に入り、一分も経たぬうちに眠りにつく筈なのに、今は数分経つても全然思い浮かば無い眠れる気がしない。

しかし、やる事も特になく、自分よの机の前の椅子に座り、電気スタンドを付ける。

電気スタンドの明かりは辺りを照らしはするものの、露がかかったような、何処か幻想的な雰囲気を作り出している。

（しかし、^{いじ} IIS学園に入つてから色々あつたな。）

入学早々、イギリス代表候補生、セシリ亞・オルコットとの決闘。認識コード最初から入つてよかつたよ。じやなきやもつと早く落ちてただろうからな。零落白夜のコマンドも最近慣れて來たし。その後仲良くなれたのも僥倖だつたな。（惚れられる）

その直ぐ後にセカンド幼馴染、風鈴音の転入。クラス代表戦。

その代表戦中にいきなり現れた無人IIS。それを鈴との共闘で撃破。鈴とも仲直り（惚れ直される）。

その後にシャルロットー当時はシャルル・デュノアートラウラ・ボーデヴィッヒの転入。いきなりラウラに殴られたつ。

タッグトーナメント戦前に、ちょっとした事故で、シャルルが女の子である事を偶然知つてしまつて。あの時は焦つたな。

で、アリーナで鈴とセシリ亞がラウラにフルボッコされるのを見て、ちょっと抑えられずに、零落白夜でアリーナのシールドを破いて突つ込んだな。そう言えばアリーナの遮断シールドも切り裂けるつてどんだけ凄いんだよ、零落白夜。

タッグトーナメント戦で第1ラウラと戦つて。途中でいきなりシュヴァルツェア・レーゲンが暴走しちゃつて、それを止めて。あの時シャルルが居なかつたら危なかつたな。

その後の臨海学校では銀の福音の暴走。一回落ちちまつたよな。あれが三途の川だと思つと、よく渡りずてふみどりまつたな、俺よ。

で、その時に、これを手に入れた。

そつ思いながら、一夏は自分のてにひつてのガントレットー白式を見る。

セカンドシフト
二次移行した白式。セカンドシフト
二次移行した白式。二次移行時に色々あつたけど。

本当にいろんな事が起きた。

ドゴッ

「ぐおー！」

感極まつていて、突然腹部に衝撃を受け、椅子ごと後ろに倒れる。

倒れた時に打ち付けた後頭部を摩りながら起き上ると、机の引き出し部分が何故か独りでに開き、中からうさ耳がある。

取り合えず、俺は放置してねむる事にした。最近何故か痛み始めた胃を摩りながら。

織斑一夏？（後書き）

さて、突然だがこの小説は結構フリーダムだと思っている。実際そうだが。なのにもかかわらず、すでにPV13000直前、ユニークも2000を超えていている。

皆様に感謝です。

因みにリクエストの方も、一夏&ヒロインズじゃなくともいいので、受け付けます。感想も勿論お待ちしております。

では、また次回。

タバネエもん・出会い前 篇（前書き）

思つた以上に難産。理由不明。短い。

一応、初長編（他に比べて）のプロローグ的な。

「これ、やつぱり抜かないといけないのかな。」

土曜日の朝。織斑一夏の呟き。

前回、無視したウサミミは、一晩経つても消えなかつた。むしろ、「はよ引っ張れや」「よみはよみ」張れや的なオーラを感じる。

そのまま放置しても、いつまでも消えそうにない。ので、しようがないく、引っ張る事にした。

「ふんっ！…おっと。」

両手を使って引っ張るが、どうやら固定されてないらしく、簡単に抜けた。力を入れすぎた反動で後ろに倒れそうになるも、なんとか踏み止まる。

「何も起きない・・・のか?」

3分位待つても、何も起きず、引き出しの中を繫々と覗くも、何も変化が無い。

なんだ。と思いながら机から背を向き、着替えようとした。した所で、変化が起きた。

突然、引き出しから光がピカーンとい音と共に溢れ出し、ガタガタと震え出す。

それを聞いて驚き、振り返る一夏。

「ふぐうーー！」

何かが顔面直撃し、そのまま気絶してしまった。

（なんか、柔らかい。）

とか思いながら。

タバネエもん・出会い前 篇（後書き）

天災の名前の読みつてタボネ？それともタバネ？自分はずつとタボネと読んでますが。

かわ、このままゲームしても良こよな・・・

評価点50 マジックタードオオオ――――――

織斑一夏は、今自分の田の前の景色を信じられなかった。

屋上へと向かひドアを少しだけ開き、屋上をドアの後ろから覗く感じになつてゐる。

その屋上に、二体のハロがいた。片方のハロは、色の艶がよく、真新しいのを見ると、どうやら最近、新しく入つたらしく。もう片方は、既に艶を失っている緑色の、所々に傷が入つてゐる、年期の入つたハロ、ハロ男だ。二体は何やら会話をしているようだ。

それだけならまだいい。よく見かけるものもある。

問題は。

「あの、それで、コレはどうすればいいのですか？」

「わ、此處に回して、しつせなよか。」

「お、おおー。」

片方の声が、どう聞いても、自分の姉にしか聞こえなかつたら、そりや信じられなくなる。

「あ、そ、ひやうで、しつせなあかん。ほれ。」

「おーちゃんと動いたー。」

結局、その日は、織斑先生による授業は、全て山田先生が代理で行つたという。しかも、文句全然なしで。

社長？（前書き）

徐々に内容がカオスになってきた。しかしそれと反比例する文字数。
どうすれば〇enz

今回は人によつては不快を感じるかも知れません。今更ですが。

社長？

デュノア社。

現在世界各地で使用されている工場量産機である「ラファール・リヴァイブ」を開発した会社である。

本日は、この会社の社長様の一日を見てみよう。

朝、五時に起きる。そのまま支度を10分で終え、出掛ける。車で二十分間掛かるシャルロット・デュノアとその母が暮らす家に着く。

郵便入れに、適當な理由での賞金と偽った仕送り金を入れる。

家の周辺に潜伏し、自分の娘、シャルロットを陰から見守る。それはシャルロットが学校に到着する七時まで継続する。

七時一十分、一度本邸に戻り、陰から見守る用の服を脱ぎ、仕事着に着替える。仕事に必要なものを持ち、朝食を済ませ、七時四十分に、会社へ向かう。

八時頃に会社に到着。三十分で書類仕事を終える。

一時頃でその日必要な仕事を全てこなし、会社を出る。

そして一旦帰宅して、陰から見守る用の服を着て、シャルロットが通う学校の近くで待機。この時、一週間に五回位は通報される。

シャルロットが校門から出ると、その後をこつそりと見守る。この時、誰かがシャルロットをナンパしようものなら、状況を見て、お話をから。O H A N A S I、物理的半殺しや社会的全殺しされる。

その後、シャルロットが帰宅するのを見て、自分も帰宅。

夕食を済ませ、寝る前に、「シャルロット・デュノア様を陰から見守る余」の会長としての仕事も済ませ、眠りにつく。

社長？（前書き）

シャルがいない間に、こんな事が起きてるんだぜ？の巻。

社長？

デュノア社。

現在世界各地で使用されている工場量産機を生産している会社である。

その会社の社長室で、デュノア社の社長が、淡々と書類仕事をこなしていた。

但し、この社長を知らない人がみれば、とても仕事をしているように見えないだろう。

田の前にあるデスクの端っこに積み上げられた書類を、田にも留まらぬ早さで一枚抜き取り、無表情なままそれを一秒にも満たさない早さで読み終える。

頭の中で三回程、半秒以内で考え、サインするものはサインした後、もう一つのしょるいのやまのいちばんつえにおく。しないものは素早く丸め、ゴミ箱の中に放り込み。

そしてまた一枚、抜き取る。

常人には真似できない速さで仕事をこなす、その動力源は、どう示せばいいのか分からぬ自分の娘、シャルロット・デュノアに対する愛である。

積み上げられた書類が半分をきた頃、突然、社長室のドアがバン！と開かれる。

ドアを開いた人物に、尚変わらない無表情で見つめる。見たことのある顔だ。

「娘を、シャルロットをください！……絶対に幸せにして見せます！……」

この少年の本田三度田の来訪である。年は16位だろう、三一ロットでは珍しい、黒い髪に同色の瞳は、決意の色を強く表している。

その言葉に、一度筆を置き、手を顎の下で組み、それに頭をおく。いつもかけている無色のメガネが光を反射し、表情が見えない。

「君に出来るのかね？」

世界的に有名な会社の社長だけあって、かなりの威圧を少年に向けてかける。

その威圧を一身に受け、それでも尚、動搖せずに大声で返す。

「できます！やつて見せます！」

その答えを聞いて、フツと笑い、口元を僅かに吊り上げる社長。

「ならばそれを私に示してみる！」

デスクを飛び越え、その拳を握りしめ、少年に向かってかけ出す。デスク上の書類に被害は無い。

それを見て、少年も拳を握りしめ、向かい打つ。その熱い戦いは、

30分間、続いたとか無いとか。

モエレー（前書き）

知っている人は知っている伝説の名空耳。一応原作名に入れました
が、多分今回きり。

モエレー

気がついたら、浜辺にいた。

綺麗な青空、煌めく蒼海、白い砂浜。
そんな夢のような浜辺だ。

- 4 -

前後左右へ、無限に広がる。しかし不思議と恐怖は感じない。

ふと、波が届かない、しかし海に近い場所で座る少女を見つけた。

「へへへ、何をいっておいでよ。」

— ハルカ —

俺は何故か、声をかける気にはなれず、その後ろに立っている事にした。

•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

モ

モモモモ

モエレー

モヒラー（後書き）

最近は自分もよく、歩いてると氣に口ずさんでしまいます。結構大きな声で。

コレ病院に行つた方がいいのかね。

織斑千冬？（前書き）

やはり関西弁難しい。

此方の方が正しいって書いたのがあつたら教えてもらいたい嬉しいです。

織斑千冬？

IS学園は全寮制である。当然と言えば当然ではあるが。

その中、週末と言つ貴重な外出機会が来ると、大半の生徒が行くところがある。

@クルーズがあるショッピングモールだ。駅と一体化しており、尚且つ広く、品揃いは豊富。なのでみんなこぞつてくる。

織斑一夏も例外ではなく、食材、生活用品、衣類など、次の一週間に必要な物をこの日に買い備える。

その時、いつものメンバーの内の一人が付いてくるのは当然。此方が頼んでいなくとも、勝手についてくるので、一人より一人の原則に沿つて、一緒に買い物をする。今回はシャルこと、シャルロット・デュノアがついている。一人とも両手に買い物袋を持っていて、既に買い物を終えているようである。

いつもなら、そろそろ寮に一回帰つて荷物を置いて、自宅の掃除を済ませるべき時間なのだが、今日は違つた。

「あれは千冬姉なのか？」

何もIS学園の生徒だけがこのショッピングモールを利用するわけでは無い。教師も必要があれば、当然する。だから別にこの場に千冬姉がいても何らおかしくは無い。

だが、今見ている千冬姉の背中には、普段IS学園に入学する前

ーでは考えられないような雰囲気を感じる。何かかなりのハイテンションな雰囲気だ。

だから、手に持つ買い物袋も、後ろについて来ながら文句を言つて
いるシャルを無視しながら後をつけ始める。

「ねえ、一夏。聞いて・・・あれつてもしかして織斑先生?」

一夏に呼びかけていたシャルも、前方で歩いている千冬姉に、特にその雰囲気に気づいたのか、驚きながら此方に聞く。前で歩いている千冬姉にばれないよう、音量を抑えて。

「うん。そう……うと、あの店に入つたぞ。」

見れば千冬姉は、このショッピングモールでそれなりに人気のある店に入った。

それを確認した一人も、少し時間をずらしてはいる。

店内で千冬姉の姿を探す。店の入り口から少し中の方に置いてある衣類品を見ているようで、その背中が見える。それを何とかばれずに接近する。

「さればどうだらうか?」

「それより、おのれのせうじやへ。おなじく、おのれのトザインやでへ。」

る? 何か、最近妙に聞き慣れた声が聞こえる。

「まう。確かにこれも中々……」

何とか千冬姉の横方向に回る。今まで組んでいたと思われたては、確かに組んではいるものの、中にはまことに入るよつて、ハローと言つより当然ハロ男がいた。

「あ、しかしこの値段が……」

「何やつたら金出とか? わいが勧めたもんやし。」

「い、いえ、」

「ええねん。綺麗な人は綺麗なもんがにあうとるよ。せやからわいが勝手に出しどつただけや、気にせんとこ。」

「綺麗つ・・・。」

「・・・

「アレつて千冬姉だよな。」

「普段と違つけど、織斑先生だよ。信じられないけど。」

耳まで真つ赤に染めて恥ずかしがるといつ、普段では絶対に見れない姿を見て、つい、隣のシャルに聞いてしまつた。

その後も、店のまゝ半分を回り、千冬は手に持つ一結局ハロ男が勧めたものしかなかつた一服をレジに渡す。

ハロ男も両サイドから手と一緒に財布も出し、代金を支払う。

それを特に驚きもせず、無反応に代金を受け取り、支払い終えた服を返す。

受け取り、帰る千冬の背中は、来たよりもさらに浮いた雰囲気、それこそ今にもスキップしちゃうだ。

そんな背中を、一夏とシャルは、只々茫然と見てはいるしかなかった。

「結局何だったのかな？」

「僕に聞かないでよ。知らない。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8189x/>

インフィニット・ストラatosさん

2011年11月24日12時01分発行